

NO,17

トウカエデ

(カエデ科)

トウカエデは唐楓で、その名のように中国東南部原産（山東省～広東省、台湾）の造園樹木です。紅葉が美しく、樹勢が強いため街路樹や公園によく植えられます。高さ20mほどになる落葉広葉樹で、樹皮は緑がかった暗灰色で、スギの皮のように細長い薄片になって縦に剥がれます。

葉は、長さ4～8cmで、上部が3つに裂けた形をしています。表面には光沢があり少しかたかかっていますが、葉裏は白っぽい色をしています。

4～5月に伸びだした枝先に淡黄色の花をつけ、秋にカエデ特有の実をたくさんつけます。実には翼がついており、風で飛び散るため周辺に広がっていきます。成長が早く大気汚染にも強く、日本の風土にマッチした生態を持っていることから、トウカエデはトウネズミモチなどとともに、日本の自然界に必要以上に広がっていくのではないかと危惧される外来植物の一つです。

秋にはみごとに紅葉又は黄葉し、公園や庭園、街路樹に利用される他、盆栽などにも使われます。



▲ トウカエデの葉



▲ トウカエデの若い葉



▲ トウカエデの実